

## 頹廢に抗う

「蝶の雑記帳 86」

歴史的に与えられ社会的機能をすでに果たし終えた一箇の統治形態が存続しようとする場合、その統治手段は頹廢的となり、統治者は道徳的に腐敗するということは歴史の教える必然的現象であるが、しかしこの現象は単に統治者の内部の問題にとどまらないのである。庄園の政治は興福寺のみで行うのではない。領主とともに住民がその統治を承認せざるを得ないが故に、それは具体的に政治として機能するのであるから、住民は統治者の頹廢を多かれ少なかれ分かち持たねばならない。政治の頹廢とはその世界全体の頹廢として現象せざるを得ないので、住民のみ独り清潔であることは出来ない。住民はその頹廢を彼らの政治的敗北の結果として、すなわち遺産として背負わされるのである…。

石母田正『中世的世界の形成』（1944年10月）

名著『ヨーロッパ戦後史』を書いたトニー・ジャットの遺書を読んだ。読むべき書物を探していてジャットの新刊翻訳書が出たのを知ったが、目次を調べると各章のつながりが弱いように感じた。そのとき、『荒廢する世界のなかで』という著作があることを知り、こちらの本を買った。亡くなった

2010年に出版され、翻訳書も同年中に出版されたもの。筋萎縮性側索硬化症と格闘しながら口述されたその書物を遺書と呼ぶのは、内容からしても的外れではないだろう。

実際、冒頭に「不安と混乱のさなかにある若者たちへ」という表題の前置きが置かれている。その十ページ余りの呼びかけは、「今日のわたしたちの生き方には、何か途方もない間違いがあります。わたしたちはこの三十年間、物質的な自己利益の追求をよしとしてきました。実を言えば、今のわたしたちに共通の目標らしきものが残っているとすれば、この追及を措いて他にありません。…それは善いことか？ それは公平であるか？ それは正義に反しないか？ それは間違っていないか？ それが果たして社会を改善し、世界を良くすることに役立つのか？ 答えは容易に見つかるわけはありませんが、まさにこうした政治的問いというものが、かつては確かに存在していました。わたしたちはここでふたたび、こうした問いを提起し直さなくてはならないのです」という書き出しで始まる。

道徳的なニュアンスを帯びる基本的な生き方の問いから始まっているのである。たしかに、それらの問いを提起し解決を模索して行動しようとするれば、問いは「政治的問い」となる。けれども、政治的問いをこんなに基礎的なところから説き起こす必要があることに、戦後を生きてきた老人はもどかしさを感じた。続く文章にも、「わたしたちには代替案の

構想ができていないように思われます」や「何かが間違っているとわれわれには分かっている。…でも何を信じたいのか？何をなすべきなのか？」などと頼りない言葉が出る。本文は、「ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス」紙のエッセイとして書かれたという。エッセイだから文体に工夫があるとしても、歯切れの悪い文章が続く、とわたしは感じた。ジャットほどの人が自分の考えや答えをもっていないはずがない。なぜそういう書き方をするのだろうか。

現状を単に批判するだけでは事態をなかなか動かさない。ジャットは、人々の考え方を揺り動かそうとしているのである。大学で若者たちに接触する著者は、若者たちが、戦後の隆盛期の社会がどうだったか、どのような経過をたどって現在の政治経済状態と思想状態に至ったかをよく知らないことに気づいた。だから、この書物はその歴史を順を追って説明するように編成され、論述は緊密さよりも分かりやすさを大切にしているのだと思われる。また、著者が住んでいたアメリカ合州国の幅の狭い政治思想の社会でも聞いてもらえるように、文章は堅苦しくない調子なのだろう。

優れた見識をもつ人たちから学びながら生きてきた老人は、記述されている事態を次のように考える。長期の歴史をふりかえると、おおよそ、社会状況あるいは人々の全般的な暮らしの良し悪しが三角関数のように周期的に変化した、と見る事が可能である。第二次大戦後の経済と社会の変化は、

詳しいデータのある現代のことだから、かなり精確な時間単位で正負の位相図に描くことができる。すなわち、戦後の復興は 1960 年ころを頂上とする正の位相をつくりだしたが、1970 年代になると負の位相に転じ、それ以後の“悪化”が転機に入ったことを 2008 年の出来事が告げた、と。

大方の人が同意するだろうこの見方に立てば、ジャットが小出しにする答えのヒントは正の位相の時代にあると考えるのが自然である。事実、戦後をふりかえりながらの議論は、しだいに直近の正の位相の時代に行なわれた善い施策をすくいだす方向に進む。第六章「来るべきものの形」では「戦後の民主主義の成功」を分析し、結びの表題は「社会民主主義 — 生きている部分、死んだ部分」で、戦後の「隆盛期」に編み出された社会民主主義を推奨する（これを受けて、翻訳書の副題は「これからの社会民主主義を語ろう」となっている）。それでも、「今わたしたちは新しい時代の門口に立っている、利己的な数十年から離れようとしている、という考えを結論にするのが喜ばしいでしょう」と、言葉づかいはつつましい。書物のレビュー紙に寄稿するほど広い見識を持ち、誰も挑戦しなかったヨーロッパ戦後史をまとめ上げる仕事をやりとげた歴史家が、このような書きぶりを本当はもどかしく感じるどころがあるはずなのに。

なぜかを考えてみて、あの人をわたしなどよりも進んだ見地に到達していたことに気づいた。2005 年までの『ヨーロッパ戦後史』を出版した 2008 年、あの世界的経済危機に遭遇、

自身の病気が見つかったころのことだったという。その切迫した状況が、歴史家に、時代の変化をいっそう明瞭に認識させたのだ。わたしは経済と社会の位相変化だけを見て、現状に不平を言うことしかできていない。しかし、その位相変化は人々の思潮まで変化させてきたのである。新聞やテレビの世論調査を見ると、あきれれるほどわたしの考え方と違う。文化全般について老人がぐちをこぼすほど時代は移ったのだ。時代は思想の面でも負の位相の最低部にある、と認識しなければならない。ジャットは誰よりも深刻にこの時代変化を認識したのだ。だから彼は、これからの思想を担う若者へ呼びかけ、物事の底から説き起こすのだ。

大まかな特徴だけに触れるのでは不十分だろう。第一章から第六章までのジャットの指摘のうち復唱すべき点を記しておこう。

第一章は「今のわたしたちの生き方」を素描し、「社会全体が陥っている深刻な浅ましき」を知らせようとする。統計指標が、ジャットの暮らす合州国と生まれた英国が、大陸ヨーロッパよりも深刻な事態にあることを教える。さまざまな面で不平等が広がったが、「自分が生まれついた境遇を改善する希望を持ってない」ほど「病理学的な」社会的事態なのだ。そして、「感情の頹廢」が起きている。日本でも自分が進歩的な立場に立つことを示すのに「リベラル」という言葉を使う人がいるが、それは、日本が社会主義的な言葉を使うのが

危険な「アメリカの特殊事情」に似てきたことを感じるからだろう。大陸ヨーロッパのことをよく知っているジャットは、若者たちに、アメリカの政治思想の幅の無さを指摘し、また、現在の「物質的な富」を求めるだけの「経済主義」が昔からのことではないことを伝えようとする。

昔あったのに失われてしまった社会を概括するのが第二章である。ただし、ノスタルジックに回顧するだけでは、現在直面している諸問題を解決することは出来ない、と釘をさした上で、資本主義につきものの不平等を緩和する思慮深い諸対策を講じる「ケインズ主義」、公共の利益のために市場の自由を抑制する「規制された市場」について語り、議論は経済から社会に進んで「共同体と信頼と共通目的」に及ぶ。そして、かつてほどほどに「偉大な社会」ができていたことを読者に知ってもらおうとする。

ところが、その社会のタガが緩んで「政治の耐え難い軽さ」が生じる（第三章）。世代分裂によって亀裂が入り、思潮が多様化していく。ハイエクなど亡命者たちの社会を押しやる自由主義は米英の経済学者を新自由主義に誘導し、サッチャーやレーガンが実際の政治でハンドルを右に切った。国家が本来的に果たすべき機能を私企業に売り渡し、「社会」は、「私的個人同士の相互活動で出来上がるうすい膜のようなものへと縮小」した。民主主義は「赤字状態」になった。

そうして、「さらばすべての古きものよ」という世になったのである（第四章）。とどめを刺したのは、1989年のソ連

と東欧の政治体制の崩壊だった。共産主義の敗退は社会民主主義を道ずれにした、「現代ヨーロッパの政治を散文で表わせば、何らかの形の社会民主主義である」にもかかわらず。では、「わたしたちは 1989 年から何を学び取るべきだったのか」。「政治の一寸先は闇であることを、腹に据えなくてはなりません。福祉国家の勃興もその後の凋落も、〈歴史〉からの施し物と考えなくてはなりません。社会民主主義の〈時機〉——あるいはそれに相当するアメリカの〈ニュー・ディール〉から〈偉大な社会〉まで——は、さまざまな状況の特殊な組み合わせで出来上がったもので、もはや繰り返す術はないのです」。しかし、「歴史は予め定められてなどいないという、正にそのゆえに、たかが死すべき者でしかないわたしたちは、生き続けているあいだに歴史を創り出さなくてはならないのです」。

英国流の思慮深さの中で育った歴史家の透徹した見解は今引用した含蓄ある言葉に表現されているが、第五章は改めて「何をなすべきか」を考察する。その後起きたことが「異議申し立て」であったことをふりかえる。だが、「今や破局が近づきつつあることを洞察して、わたしたちは立ち上がらなくてはなりません」。それには、「私たちの世論を鍛えなおすことこそ、変革を実現する唯一現実的な方法だと、わたしには思えるのです。今とは違う語り方をしなければ、わたしたちには違う考え方などできないに決まっています」。わ

たしたちは今日、現実的な問題「社会問題」に直面している。

「わたしたちは、他を捨てて一つの政策あるいは一組の政策を選び取るのに、理由が必要なのです。わたしたちに欠けているのは道德の物語です。それはすなわち、わたしたちのさまざまな行動に対して、それらの行動を超越する仕方での目的を考える、本質的に首尾整った説明です」。冒頭の呼びかけがなぜ道德的ニュアンスを帯びていたかが明かされている。「不平等の克服が第一番目に来なくてはなりません」。

こうして、「来るべきものの形」を構想する第六章が来る。

「これからの社会民主主義」を編み出すには現状を正しく認識しなければならない。それゆえ、「グローバル化」を見つめ、「グローバル化した競争によって生じるジレンマに対して、必要な規模で対応できるのは政府だけ」という認識を提示する。「国家が介入してもよいばかりか、介入すべきであるような分野がある」のである。この考え方は、かつて、「保守派にとってもタブーでなかった」のだ。ジャットは、ケーススタディとして、サッチャー政権が始めた国有鉄道の民営化が現在に至って露呈した問題を解説する。歴史家の眼で現在の政治状況を見て、反民主主義的な時代の到来を心配し、「国家が保証しなければ自由など存在せず、逆に、自由な市民が運営する国家だけが、市民に対して、道理にかなった自由を提供できるのである」という K・ポパーの言葉を引用する。



この思索の冒頭に掲げた文章は、若い石母田正が敗戦必至の1944年10月に書き上げた作品のなかにある。ジャットの議論を受けとめれば、第二次世界大戦の荒廢のなかからつくられたヨーロッパと日本の戦後の体制も、今や、歴史的に与えられ社会的機能をすでに果たし終えた、と見ることができる。ジャットの本の原題は『ILL FARES THE LAND』だが、日本の優れた歴史家の到達した歴史法則の言葉を使えば、現在の世界を「頽廢した世」と呼ぶことができるだろう。

そうすれば、ジャットの「前置き」の文章がよく理解できる。情報化の進んだ大衆社会では、統治者という言葉の輪郭がぼやけて聞こえるけれども、政治と世相をよく見究めれば、歴史の必然性「統治手段は頽廢的となり、統治者は道徳的に腐敗する」が現在に当てはまる、とわたしは思う。そして、上品な呼び名をもらった市民も道徳的に頽廢を分かちもっていると考えなければならない。だから、ジャットがするように、生き方の道徳性にまでさかのぼって問いかけなければならないのである。しかも頽廢は、頽廢の世に育った若い世代だけでなく、頽廢をもたらした上の世代にこそ当てはまる。したがって、ジャットの言葉が自信なげに聞こえるというわたしの受けとめは浅はかなのだ。彼は、頽廢の世に暮らしていることを自覚し、自分のこととして根本から考え直そうとしている、ととらえなければならない。

ジャットの遺書となぞらえた著作は2010年に出版された

が、それから十年が経とうとしているのに、世界の荒廃はいつこう改善しない。2008年の経済危機も忘れ去られたかのように、以前と同じような経済運営が続いている。しかし、社会の困難は底にわだかまっている。目に見えやすい政治の動きに、ジャットが生きていたら眉をひそめただろう状況が世界に広がって、むしろ、彼が望んだこれからの社会民主主義を語る情勢とは逆のことが起きつつある。

覇権の後退が目立つ米国のもがきは政治に現われている。製造業の衰退をとりつくろうために、まだ残っている金融資本の力と政治・軍事的な力に頼って、“ディール”を声高に叫ぶ大統領もしくは資本取扱人が登場した。かつてニュー・ディール政策が効果をもったことも忘れられて、社会にテコ入れする意思はない。英国では、あがきがEU離脱問題に先鋭化して国民の分裂が政治を停止させ、対するEU諸国でも、社会民主主義的政策に反対する勢力が現われて政治の先行きに影を落とす。あとに続く新興国の政治も反動的になって波乱含みである。世界の荒廃あるいは世の頹廢がグローバルな政治状況を混乱に向かわせている、と見ざるをえない。鈍感にこの状況を眺めていると、周回遅れで米国に追随してきた日本が立ち往生する時が来るのではないかと心配症の老人は思う。

社会的・民主的立場に立って発言してきた人たちも高齢になりつつある。ジャットは惜しくも早く亡くなったが、世界

システム論を提唱したI・ウォーラーステイン(1930年生まれ)は、高齢になっても活動し1998年からインターネット上に毎月二回時評を発表してきたが、今年7月500回目を節目に中止を告げた。高齢がその理由である。ほかにも退場しつつある人として名を挙げるべき人がいるだろう。他方で、社会民主主義的立場に批判的だった人も高齢になって、中には、世があまりに“右傾化”して自分がそれを批判せざるをえない位置に立たされていることに気づいた人もいる。戦後の変遷を観てきた見識ある人々が言論の場から退場すれば、若い世代が世界の荒廃について気づく機会は減るだろう。改善へと向かう時代はいつ来るのだろうか。

ウォーラーステインは、16世紀にオランダを中心に駆動を始めた資本主義を理論の中心に据えて世界システム論を展開したのだが、今や資本主義が機能不全になって、世界は新しいシステムを形成するのに苦闘していると考ええる。新しい政治体制が多くの人々に受け入れられるほど温和なものになるのかもっとひどいものになるのか、今後の中期的な歴史の進行にかかっている、とくりかえし警鐘を鳴らしてきた。ジャットはウォーラーステインの概括的な語り方を批判したが、社会的・民主的立場は共通していたのだと思う。ジャットが遺書にしたための「これからの社会民主主義」を開拓しようという若い世代への呼びかけが届くことを願いたいものだ。

それにしても、ウォーラーステインが機能しなくなったと断定する資本主義は、2008年の危機をやりすごし、表面だけを見ていると何事もなかったかのように経済活動を続けている。首相が経済の成功を粉飾して自画自賛する国では、いっそうそのように見える。W・シュトレークが、この数十年の世界経済を「時間かせぎの資本主義」と喝破する書物を出したのは2013年のことだった。せわしなく流動する時代なのに、「いつまで危機を先送りできるか」という心配が下火になったかのような経済状況が続く。せっかちな老人はそれを不思議な面持ちで眺めている。

この状況が教えるのは、われわれのグローブはそれぐらいには大きく、77億人の人間たちの経済活動は予測が困難なほど複雑だということである。しかし、こういう時間かせぎは地球を消耗させることによって続いているのではないか、という危惧を抱く。地質学的年代を「人新世」と呼ばなければならぬほど人類の活動が昂進しているが、資本主義経済は、生態圏を破壊し地球環境を回復不可能なほど変更することによって延命しているのではないか。「時間かせぎの資本主義」は、そのつけを単に次世代に押し付けているのではなく、人類の命運を切り売りしてその場しのぎをしているのではないか。そうだとすれば、資本主義的な経済運営は、歴史的に与えられた機能を果たし終えてむしろ人類にとって桎梏となっているのではないか。

わたしの心配は、現在の頹廢はけっして軽度なものではない、すべての人間がこの頹廢を分かちもって、頹廢という言葉ではなまぬるいほど深刻な事態だという思いにまで嵩じる。当面のこととしても、ジャットの勧めるこれからの社会民主主義あるいは若い世代が編み出すはずの新しい社会運営の方式は、資本主義的経済の迷走を制御できるだろうか。隠棲している老いた園丁はどうすればよいのだろうか、何ができるだろうか、ただむなしく思索をさまよわせている。

2019年9月仲秋、清書

海蝶 谷川修

- \* 新聞によれば、ウォーラステインが8月31日に亡くなった。月日はとどまることがなく、世代は徐々にしかし確実に交代し、社会は必然的に変化する。